



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Passing into the Darkness : Sexuality, Race, and Integration of the Segregated in the Works of the Southern Renaissance [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	松井, 美穂
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11178号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55345
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Miho_Matsui_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 松 井 美 穂

学位論文題名

Passing into the Darkness:

Sexuality, Race, and Integration of the Segregated in the Works of the Southern Renaissance

（南部ルネサンス文学におけるセクシュアリティ、人種、そして越境する主体）

本論文では、アメリカ南部ルネサンス期（1920年代～50年代）の白人作家が、人種的他者の視点を内包する二重の視点（double vision）を通して南部社会を表象することで、南部で自明のものと思われているホワイテネスを解体し、南部社会の虚構性を問い、あらたな（ジェンダーとセクシュアリティを含めた）性的、人種的主体を模索していったことを論じる。

南部社会においてホワイテネス／ブラックネスの差異を構築する重要な要素はセクシュアリティである。それは「セクシュアリティの欠如」あるいは「（白人の子孫を残すための）正しいセクシュアリティ」／「正しくないセクシュアリティ（ブラックなセクシュアリティ）」、ヘテロセクシュアリティ／ホモセクシュアリティという二項対立として図式化され、前者は白人の、後者は黒人の領域に配分される。特に白人女性のセクシュアリティは、それが混血を阻止し純粋な白人社会を維持するための砦であったためホワイテネス構築の要であり、であるから白人女性が南部の規範から逸脱し、黒いセクシュアリティの領域に踏み込むことは、南部社会のシステムの根幹に関わる問題であった。また、南部社会が「白人の異性愛者」を主流としているのであれば、ホモセクシュアリティは他者の領域であり、逆に言えばホモセクシュアルであることはすなわちホワイテネスを失うことに通じる。このように南部ではセクシュアリティの境界を監視することは、人種の境界を監視することと深く結びついていた。

本論文で扱う作家は、このような人種とセクシュアリティの結びつきを認識した上で、その文学表象においてセクシュアリティを通して他者の（ブラックネスの）領域に越境し、ホワイテネスの構築性、南部社会の虚構性を明らかにする。そして、南部における社会とアイデンティティ形成の関係を問い直し、新たなアイデンティティの可能性を探求する。

本論文は4章からなり、それぞれの要旨は以下の通りである。

第1章 “Sexualizing a Pure Body, Passing as a Lady: Frances Newman’s *The Hard-Boiled Virgin* (1926) and Julia Peterkin’s *Scarlet Sister Mary* (1928)”では、これまで南部ルネサンス作家のキャノンとはみなされていなかった二人の女性作家 Frances Newman と Julia Peterkin の作品を、南部社会における人種とセクシュアリティの関係を意識し、ブラックネスの領域に越境したパイオニア的作品と位置づけ、Newman がモダニズム的な実験的スタイルを用いながらいかに白人男性中心の社会規範の解体を試みたか、また Peterkin においては、黒人女性を主人公にしながらその女性を自らの「マスク」にすることで白人女性として抵抗のための「声」を獲得する様子を論じている。

第2章 “Black Vision and Grotesque Whiteness: Julia Peterkin’s Short Novels, Eudora Welty’s ‘The Burning’ (1951), and William Faulkner’s ‘A Rose for Emily’ (1930)”では、南部ルネ

サンス文学の一つの大きな特徴である「グロテスク」について再考し、ここで取り上げる作品が描く「グロテスクなもの」は実は、真に「グロテスク」なのは通常グロテスクとはみなされないもの、つまり人種差別を基盤とし一見秩序だった規範の南部社会こそがグロテスクであることを暴露する「グロテスク」であり、そういった意味ではここで描かれる「グロテスク」は subversive かつ liberatory なものであることを主張する。

第3章 “The Sexuality, Masculinity, and Fragile Whiteness of Quentin Compson in *The Sound and the Fury* (1929) and *Absalom, Absalom!* (1936)” では、Faulkner 作品において最も南部の伝統に捕われている人物 Quentin Compson を通して南部白人男性の黒人性（の構築性）を考察する。*The Sound and the Fury* において、Quentin は通常、妹 Caddy の墮落故に自殺したと見なされているが、むしろ Caddy のセクシュアリティは Quentin に南部白人男性としてのアイデンティティの不可能性を認識させるとともに、ホワイテネスが常にブラックネスに浸食されていることを認識させるものとして機能している。また *Absalom, Absalom!* においては、*The Sound* すでに示唆されていた Quentin のセクシュアル・アイデンティティの曖昧さが前景化され、主体と主体の区分が不明瞭となる「聴く-語る」という行為の中で、Faulkner が「安定したアイデンティティ」の虚構性を追求して行く様を分析している。

第4章 “Crossing into Queer Whiteness: Carson McCullers’ *Reflections in a Golden Eye* (1940), *The Member of the Wedding* (1946), and *The Ballad of the Sad Café* (1943)” は、南部社会の規範から逸脱した人物（ホモセクシュアルである南部軍人、トムボーイである南部少女、男性的な独身女性）を通して、McCullers がいかに規範的アイデンティティを超えて新たな性的、人種的主体を模索したかを論じる。第1部では、黒人と同様南部では人種的他者である「女性的なフィリピン男性」と対比することで、登場人物自らの南部白人男性の曖昧なセクシュアリティに気づく様を明らかにする。第2部では、一見、規範を逸脱した少女が規範的な白人女性へと成長する物語に見える作品において、実はクィアな主体の可能性が最後まで放棄されていないことを論じる。その際、通常白人女性のホワイテネス構築に重要な役割を果たしてきた黒人乳母が、ここでは subversive な役割を果たしていることを指摘し、また男性のホモソーシャルな関係に対する女性同士の関係の意義に関しても考察する。最後の第3部では、男性的な女性主人公が男性中心社会によって仕返しをされる物語として解釈されている作品を、主人公のクィアな（斜めの）視線を通して白人男性の支配に抵抗する物語と解釈し、その視線の意味、つまり、男性／女性、白人／黒人、異性愛／同性愛といった直線的な二項対立が支配する社会を「斜めに横断する」視線の意味を論じる。

結論部では、南部の白人中心の人種的アイデンティティの構築は、ホワイテネスの領域から排除したものを黒人に投影することで成り立っていること、従って、黒人の他者性とはそもそもホワイテネスの一部であることを指摘する。そして、本論で取り上げた作家は、厳しい人種隔離の時代において、また、南部農本主義者が solid な南部社会を主張していた時代において、白人こそがホワイテネスというものに幽閉されているということを感じ、その文学表象を通じて「他者とは私の一部である」という認識こそが解放の契機となりうることを示唆し結論としている。